

「救い主の誕生」

ルカの福音書 2:1~20

はじめに

今日の箇所は、毎年 12 月になるとほとんどすべての教会で語られる、クリスマスの物語と呼ばれるものです（今日は 2 月 27 日ですが…）。私も小さい頃、教会でこの物語の劇をし、その時の私はベツレヘムの宿屋の主人の役でした。ヨセフが身重のマリアを連れて私の宿屋に来るのですが「ここはもういっぱいだ。ほかをあたってくれたまえ。」と言って追い返す役でした。私はかなり緊張しながらも見事にこの役を演じ切りました。つまり私はヨセフとマリアを、そのお腹のイエス様を冷たく追い返したのです。今思えば嫌な役をやらされたとつくづく思います。しかしある他の教会で、私と同じ役をやらされた一人の女の子がいたのですが、劇の本番で、その子をはじめは私と同じように役を演じ、マリアとヨセフを追い返そうとするのですが、どうしてもがまんできなくなって思わず「イエス様行かないで！私のところに来て！」と叫んでしまったそうです。教会学校の先生も他の役をやっていた生徒たちもびっくり仰天でしたが、その女の子のイエス様を求める心からの叫びに、会場は笑いとともに大きな感動につつまれたそうです。私は今日の箇所を調べながらそんな話を思い出し、イエシュアを待ち望む思いをまた新たにされました。それでは今日も神のご計画の視点から読み解いてまいりましょう。

1. 住民登録

ルカの福音書【新改訳 2017】

2:1 そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストゥスから出た。

2:2 これは、キリニウスがシリアの総督であったときの、最初の住民登録であった。

2:3 人々はみな登録のために、それぞれ自分の町に帰って行った。

2:4 ヨセフも、ダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。

2:5 身重になっていた、いいなずけの妻マリアとともに登録するためであった。

上記の内容はイエシュアの初臨、すなわち今からおよそ 2000 年前、ユダヤ人の幼子としてお生まれになったその当時の状況、時代背景を説明しています。時の大国ローマが全世界を支配し、その皇帝（カエサル）は単なる支配者としてではなく、神にも等しい存在、現人神（あらひとがみ）として君臨していました。アブラハム、イサク、ヤコブの神、イスラエルの主なる神だけを唯一の神とするユダヤ人たち、イスラエルの民にとってこのローマに、カエサルに支配されることはその信仰姿勢を脅かされる、迫害を受けることとなりました。その結果、ユダヤ人たちは神に従うように、カエサルにも従うように強要され、「あなたには、わたし以外に、ほかの神があってはならない。（出エジプト記 20:3）」という十戒の第一の教えに背いていました。

そのような状況の中、ユダヤ人たちは、彼らの神の前にさらに罪を重ねることになります。それは「**住民登録**」という罪です。住民登録とはすなわち、人口を調査し、その数を数えるということですが、一体そのどこがいけないのか、なぜ罪なのかと思われるでしょう。もちろんその行為自体が罪というわけで

はありません。誰に従い、また何のためにそれを行うのかということが罪に値するのです。かつてこの「[住民登録](#)」を行い、神の激しい怒りを引き起こした人物がいます。それはイスラエルの王ダビデです。

I 歴代誌【新改訳 2017】

21:1 さて、[サタン](#)がイスラエルに向かって立ち上がり、[イスラエルの人口を数える](#)ように、[ダビデをそ](#)
[そのかした](#)。

21:2 ダビデはヨアブと民の長たちに言った。「さあ、ベエル・シェバからダンに至るまでのイスラエルを
数え、私に報告しなさい。[その人数を私が知るためだ](#)。」

21:5 ヨアブは民の登録人数をダビデに報告した…。

21:7 [この命令は神の目に悪しきこと](#)であった。神はイスラエルを打たれた。

21:8 ダビデは神に言った。「私は、このようなことをして、[大きな罪を犯しました](#)。どうか、このしもべ
の咎を取り去ってください。私は本当に愚かなことをしました。」

21:14 【主】はイスラエルに疫病を下されたので、イスラエルのうち七万人が倒れた。

このように、ダビデは「[イスラエルの人口を数える](#)」ことによって「[大きな罪を犯しました](#)」。なぜならそれは「サタン」にそそのかされて、騙され、惑わされ、神ではなく悪魔に従った行為であったからです。またそれは「[その人数を私が知るためだ](#)」とあるように、本来神の所有の民、神のものであるはずのイスラエルの民を、ダビデは自分のものと考えたために行ったものであったからです。その結果、「[イスラエルのうち七万人が倒れた](#)」とあり、ダビデは、イスラエルは大きな痛手を被ることになりました。このように、「[住民登録](#)」とは大きな罪とそれによってもたらされる激しい苦しみ、痛みを指し示すものなのです。イエシュアの誕生当時のそれも、神ではなくカエサルという自分を神と偽る人に従って行われたものでした。つまりこの時、イスラエルはその神ではなく人に従う、それをそそのかすサタン、悪魔に従うという大きな罪のただ中であつたのです。

これらの記述、これらの事実から、私たちは何を学ばなければならないのでしょうか。何を見なければなら
ないのでしょうか。サタンに惑わされないように、人や自分自身の思いではなく、神に従う者となりま
しょう、というような教え、また戒めでしょうか。それでももちろん結構ですが、私が心からお勧めする
のは、やがて終わりの日に起こる神のご計画の「型」がここには表されているということです。それはす
なわち、イエシュアが来られる、イエシュアの再臨という事実です。つまり上記のイエシュアの初臨の記
述には、すでにその再臨の事実が表されているということです。現人神であるカエサルの支配と「[住民登
録](#)」という大きな罪は、やがて終わりの時代に現れる獣、反キリストと、これに騙され、従わされるイス
ラエル、ユダヤ人たちの姿を指し示しているのです。神の敵であるサタンの最後の切り札であるこの獣は、
その力とわざで、そして言葉巧みにイスラエルを騙し、自分こそが神の御子キリスト、メシアであると信
じ込ませようとします。その結果、ダビデの時代よりももっと多くのイスラエルの民が倒れ、殺されるこ
とになるでしょう。しかしその時こそがイエシュアが生まれる、すなわちイエシュアが再び来られる時で
あるということがここには表されており、そのような神のご計画があるということにぜひ目をとめていた
だきたい、覚えていただきたいのです。

ちなみに、この「住民登録」のことをヘブル語でミフカード(מִפְקָדִים)といいます。パーカド(פָּקָד)という言葉がその語源となっており、「顧みる」という意味があります。その最初の言及は創世記 21:1 です。

創世記【新改訳 2017】

21:1 【主】は約束したとおりに、サラを顧みられた。【主】は告げたとおりに、サラのために行われた。
21:2 サラは身ごもり、神がアブラハムに告げられたその時期に、年老いたアブラハムに男の子を産んだ。

これはイスラエルの父祖アブラハムとサラにイサクという「男の子」が生まれた時のものですが、神である主は「約束したとおりに」「告げたとおり…行われ」る、「告げられたその時期」に「男の子」は生まれる、与えられる、来られる、それが「顧み」るというパーカドの持つ本来の意味です。つまり「住民登録」が行われたというこの時代背景自体が、神の御子であるイエシュアが生まれる、そしてやがて再び来られるという神の約束、予告、ご計画を指し示したものだということなのです。ですから私たちは聖書に記された、指し示されたその神の約束、ご計画に目をとめるべきなのです。

2. しるし

ルカの福音書【新改訳 2017】

2:6 ところが、彼らがそこにいる間に、マリアは月が満ちて、

2:7 男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所
がなかったからである。

2:8 さて、その地方で、羊飼いたちが野宿をしながら、羊の群れの夜番をしていた。

2:9 すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。

2:10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、
大きな喜びを告げ知らせます。

2:11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリスト
です。

2:12 あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。それが、あなたがたの
ためのしるしです。」

「救い主」イエシュアの誕生が記されています。そしてここで御使いが「あなたがたのためのしるし」として「布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりご」の姿を指し示しています。布でくるんでいるとはいえ生まれたばかりの赤ん坊を家畜が食べるえさを入れる飼葉桶に寝かせるというのは、もちろん珍しい光景、というかとんでもない、常識ではありえないであったと思います。ですからここにも当然何らかの意味があると考えるべきです。では「飼葉桶」そして「布にくるまって」いるというこの二つの言葉の意味を探してみたいと思います。

① 飼葉桶

この「飼葉桶」ヘブル語のエーヴース(עֶבֶס)を用いた預言がイザヤ書 1:3 にあります。

イザヤ書【新改訳 2017】

1:2 天よ、聞け。地も耳を傾けよ。【主】が語られるからだ。「子どもたちはわたしが育てて、大きくした。しかし、彼らはわたしに背いた。

1:3 牛はその飼い主を、ろばは持ち主の飼葉桶を知っている。しかし、イスラエルは知らない。わたしの民は悟らない。」

1:4 わざわいだ。罪深き国、咎重き民、悪を行う者どもの子孫、墮落した子ら。彼らは【主】を捨て、イスラエルの聖なる方を侮り、背を向けて離れ去った。

このように「飼葉桶」は、「イスラエルは知らない。わたしの民は悟らない」という、イスラエルの民の霊的盲目性、つまり神のご計画はもちろんのこと、神ご自身にさえも目を背け「背を向けて離れ去っ」てしまおうという、イスラエルの背信、不信の状況、状態を指し示す言葉なのです。

② 布にくるまって

そしてそのような背信のイスラエルが、神に見捨てられることが「布にくるまって」ヘブル語でハータル(לחתך)という言葉には指し示されています。

エゼキエル書【新改訳 2017】

16:1 次のような【主】のことばが私にあった。

16:2 「人の子よ。エルサレムにその忌み嫌うべきわざを告げ知らせよ。

16:3 『【神】である主はエルサレムについてこう言われる。あなたの出身、あなたの生まれはカナン人の地、あなたの父はアモリ人、あなたの母はヒッタイト人であった。

16:4 あなたの生まれについて言えば、あなたが生まれた日に、あなたは、へその緒を切られず、水で洗いきよめられず、塩でこすられず、布で包まれることもなかった。

16:5 だれもあなたにあわれみをかけず、これらのことの一つでもあなたにしてやって、あなたに同情しようとはしなかった。あなたの生まれた日に、あなたは嫌われ、野に捨てられた。

イスラエルの首都、聖なる都とも呼ばれるエルサレム、それが「嫌われ、野に捨てられ」ることが預言されている箇所にハータルが使われています。旧約聖書でこの言葉が使われているのはこの一か所のみです。確かにイエシュアの初臨の時代もユダヤ人たちはカエサルに従い、エルサレムはローマの支配下にありました。その結果イエシュアはユダヤ人たちから拒絶され、ローマの刑罰である十字架で処刑されます。しかし述べたように、イエシュアの初臨は、その再臨の「型」です。つまりイエシュアが再臨される時もまたユダヤ人たちが、そしてエルサレムがそのような状況となることが示されているのです。すなわち獣、反キリストによるユダヤ人への大迫害です。これが行われる時、イエシュアは再臨されます。その様子を表したものが次の記述です。

3. 天の軍勢

ルカの福音書【新改訳 2017】

2:13 すると突然、その御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。

2:14 「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」
2:15 御使いたちが彼らから離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは話し合った。「さあ、ベツレヘムまで行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見届けて来よう。」

「御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れ」ます。そして神を賛美し、再び「彼らから離れて天に帰っ」て、天に上って行ったのです。地上に降りることも、とどまることもなく「御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が」天に上って行ったのです。もう一度言います。「その御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れて」そして「彼らから離れて天に帰った」のです。これがイエシュアの再臨です。このようなことがイエシュアの再臨の時に起こります。すなわちこういうことです。

テサロニケ人への手紙 I 【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、
4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

イエシュアの空中再臨、「携拳」と呼ばれる出来事、それがこの「御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れ…天に帰った」という記述に表された神のご計画の「型」です。私たち教会はこの時によみがえらせられ、あるいは生きたまま新しい身体に変えられて、イエシュアと「御使いと一緒に」「一緒に雲に包まれて引き上げられ」ます。「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」私たちは毎週この賛美を礼拝の最後に歌っていますが、このように、この賛美は御使いたちの歌った歌というだけではなく、やがて携拳される私たちが歌うべき歌でもあるのです。今日からはぜひそのような思いで賛美されることをお勧めします。

このようにイエシュアの空中再臨、私たち教会の携拳は、イスラエルの民がその霊的盲目さのゆえに獣、反キリストに騙され、大患難とも呼ばれる大きな迫害の苦しみを受ける時に起こることがここには表されているのです。では、携拳されることなく地上に残されたイスラエルの民、ユダヤ人たちはどうなるのでしょうか。彼らには救いが来ないのでしょうか。いいえ、この後すぐに彼らもまたイエシュアに出会います。見つけます、捜し当てます。しかしそれは空中ではなく、この地上で起こります。それを表す「型」となる出来事が次の箇所です。

4. 捜し当てる

ルカの福音書 【新改訳 2017】

2:16 そして急いで行って、マリアとヨセフと、飼葉桶に寝ているみどりごを捜し当てた。
2:17 それを目にして羊飼いたちは、この幼子について自分たちに告げられたことを知らせた。
2:18 聞いた人たちはみな、羊飼いたちが話したことに驚いた。
2:19 しかしマリアは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。
2:20 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

羊飼いたちは「ベツレヘム」でイエシュアを見つけ、見事捜し当てます。この町の名は「家」という意味のベート(בֵּית)と「パン、食糧」という意味のレヘム(לֶחֶם)からなる名です。以下の御言葉はレヘムの最初の言及です。

創世記【新改訳 2017】

3:17 また、人に言われた。「あなたが妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、大地は、あなたのゆえにのろわれる。あなたは一生の間、苦しんでそこから食を得ることになる。

3:19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついにはその大地に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたは土のちりだから、土のちりに帰るのだ。」

これは神がアダムに語られたものです。このように「糧」レヘムとは本来、単なる食べ物という意味ではなく、苦痛や苦難を経た結果として得るもの、苦しみを伴うものという意味があるのです。それはまさに、携拳されることなく、この地上で大きな患難という呪いを受け、大いに苦しんで、その後にイエシュアを見出す、イエシュアに出会う、イエシュアを神の御子メシアとして受け入れるようになるイスラエルの民の姿を指し示しています。つまり、羊飼いたちがイエシュアを捜し当てたというこの記述、出来事には、イエシュアの空中再臨の後に起こる、イエシュアの地上再臨の事実が表されているのです。そして羊飼いたちが「神をあがめ、賛美しながら帰って行った」という記述には、天ではなくこの地上においてイエシュアがお建てになる「御国、神の国」という家に、イスラエルの民が帰る、神に立ち返るということが表されているのです。

5. プレゼント

今日の箇所は長らくの間、イエシュアの誕生、初臨の事実としてのみ理解され、毎年12月になるとほとんどすべての教会で、クリスマス物語としてそれは取り上げられ、語られ、祝われてきました。そしてイエス・キリストは神様からのプレゼントで、本当のクリスマスプレゼントとはこの御方のことです、と宣べ伝えられてきました。しかし今日述べたように、イエシュアの誕生はイエシュアの再臨の「型」でもあり、そしてそれは神のご計画の完成のための二つの大きな出来事すなわち、イエシュアの空中再臨による教会の携拳と、イエシュアの地上再臨によるイスラエルの回復と神の国の到来の事実が表されているのです。やがてイエシュアの初臨の時代に起こったローマのような巨大な帝国が、カエサルのように自分を神とする獣、反キリストによって起こるでしょう。彼の最大の目的は教会とイスラエルを滅ぼすこと、この地上から根絶やしにすることです。その史上最大の脅威、圧政から救うために「救い主」イエシュアは来られるのです。その事実、その約束、計画の成就こそが神様からのクリスマスプレゼントの中身なのです。アメリカなどではクリスマスが近くなるとプレゼントはきれいにラッピングされてツリーの下に置かれ、子どもたちはそのラッピングされたプレゼントを毎日眺めながら、その中身を想像しながら、それを開けるクリスマス当日の朝を心待ちにするそうです。私たちは今ちょうどそんな子どもたちのような状況です。ですから神様からのクリスマスプレゼントである、救い主イエシュアの再臨を、イエシュアが来てくださる日を思いながら、まさにマリアのように「これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らし」ながら、その日を待ち望みましょう。